

科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）研究成果報告書

平成25年 6月 4日現在

機関番号：16201

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2011～2012

課題番号：23652109

研究課題名（和文）効果的な英文校正ストラテジーの試み

研究課題名（英文）Exploring Effective Editing Strategies

研究代表者：

ウィリー、イアン・ディビッド（WILLEY IAN DAVID）

香川大学 大学教育開発センター・講師

研究者番号：90403774

研究成果の概要（和文）：

英語を母国語とする英語教員を対象に半構造的インタビューと思考発話法を用いて、英語論文抄録校正における思考プロセスとそのアプローチについて明らかにした。その結果、英語教員は校正の際、特に専門用語に関して多くの困難感を感じていることが明らかとなり、著者との相談に加え外部資源により情報を得ることなどが、英語教員による論文校正の質を高める可能性が示唆された。

研究成果の概要（英文）：

Through interviews and think-aloud editing tasks, this study examined the thought processes and learning experiences of native-English-speaking English teachers editing scientific abstracts. We learned that these teachers experienced much difficulty when editing, especially regarding terminology; consulting outside sources as well as authors will improve the quality of English-teachers' editing work.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
交付決定額	1,000,000	300,000	1,300,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・英語学

キーワード：ネイティブチェック、思考発話法、再生刺法インタビュー、半構造的面接、科学英文論文・抄録

1. 研究開始当初の背景

学術、特にハードサイエンス分野の国際的出版言語は、今や英語である (Loria & Arroyo, 2005)。しかし、英語を母国語としない研究者の多くは、英語でのアカデミックライティングを正式に学んだ経験が乏しく、パブリケーションするために援助を求めている。翻訳業者を利用することも可能であるが、これらの業者は一般的に高額であり、またその信頼性に関して疑問視する報告もある

(Salager-Meyer, 2008; Huang, 2010)。別の手段として、大学であれば同僚の英語教員から支援を受けることがあるが、その英語教員は依頼された特定のフィールドに関する経験が乏しい、あるいは熟知していないことも多い (Willey & Tanimoto, 2009)。

先行研究は、英語教員による専門的校正の効果に対して疑問をあげている (Benfield & Feak, 2006)。英語教員は科学的文章校正に関してストレスや困難感を感じている可

能性もある。さらに、日本人研究者により執筆された論文がジャーナルや学会にアクセプトされるようにサポートすることが、英語教員ではできない可能性もある。

我々は、医療専門職者と英語教員によって行われたテキスト校正に関する検証を行った。その結果、英語教員は、医療専門職者より校正を加える箇所が多かった。また、医療専門職者は、英語教員に比較して語彙的結合に集中しており、加筆を行うことが少ない傾向があり、定冠詞「the」の使用に関する関心が乏しいことが明らかとなった。

本研究は、英語教員校正者(いわゆる「native checker」)が直面する英文校正の取組をさらに解明するため、インタビューと思考発話法を用いて、校正時の思考過程および校正に関する学びとアプローチを明らかにする。

2. 研究の目的

英語教員校正者および英語で学術論文・抄録を執筆する日本人研究者に対するサポートを得るために、本研究では以下の事を目的とする。

- 1) 科学的校正に対する英語教員の取組、および学びを明らかにする。
- 2) 校正時の思考発話法とインタビューにより、科学的抄録校正に関する思考過程を明らかにする。
- 3) 校正経験豊富な英語教員校正者が用いる校正技術、および校正の課題を明らかにする。
- 4) 校正経験豊富な英語教員と医療専門職者の「the」の使用に関する関心の違いを明らかにする。

3. 研究の方法

1) 事前インタビュー

英語を母国語とする英語教員 (n=4) を対象に半構造的インタビューを行った。その

内容はこれまでの校正経験や校正に対する考えなどである。

2) 思考発話法

これは、英語教員が抄録校正中の思考を全て口に出して言語化、録音するもので、その後、研究者により録音内容を逐語録にし、データとする。校正経験豊富な英語教員 10名に対して、医療分野の抄録 1編の校正を、さらにこのうち5名に対して、別の医療分野と工学分野の抄録 2編の校正を依頼し、この思考発話法によりデータを得た。なお、校正対象とした抄録 3編はいずれも日本人研究者によって作成されたもので、本研究で用いることに関して許可を得た。

3) 再生刺法インタビュー

思考発話セッション終了後、校正した抄録に関して確認する再生刺法インタビューを実施した。

4) データ分析

①インタビューと思考発話の逐語録を質的に分析し、英語教員の困難感と校正方法を明らかにした。

② 医療分野の抄録における英語教員が行った冠詞「the」に関する修正を確認し、先行研究で得た医療専門職者のデータと統計的に比較した。

4. 研究成果

1) 半構造的インタビューにより、英語教員における科学的校正作業に対する学びや取組が、以下のように明らかとなった。

①専門用語、学術的スタイル、その他の科学的ライティングの特徴

取り扱う学術分野の専門用語や論文スタイル、文章などに慣れることが、より効果的な文章校正に重要であり、さらに英語教員の専門的校正に対する取組を改善させるであろう。これらは、校正作業の経験を重ねる事や校正作業中に、例えば、オンラインジャー

ナルの情報を得るなどのことから獲得されるだろう。

②校正過程における著者との関係

校正過程において、対象となった英語教員は、科学的論文における言葉遣いや内容に関して著者の意図に対する自分の理解を確認・質問するために、著者と関わろうとしていた。しかし、著者とは相談することができなかつたり、著者が校正に関して関わる気がない場合もあったと、研究参加者は報告した。著者に確認がとれなければ、校正作業は不確かで、教員にとってただ負担になるだけであった。

③著者の母国語（日本語）を使用して行うコミュニケーション能力

研究参加者は、校正の際に著者の意図を理解し、適切なアドバイスを提供し、より効率的に時間を使うために、日本語で著者とコミュニケーションする能力が重要であると感じていた。そこで、普段、学生とは英語を使い会話をしている場合でも、英語教員はそれとは異なる方法で著者とコンタクトを取っていた。しかし、研究参加者は英語教員としての主たる業務と同様に、日本人著者に対し、校正中の提案から学び、自分で英語論文を執筆・投稿する力を持ってほしいと望んでいた。

④ヘルスケア/科学的研究における早期の研修、集中訓練経験

特定領域のライティングに関する研修受講などは参加者にとって科学的試みに対する評価を高め、専門的校正に対するより好意的な見方に繋がるかもしれない。専門的校正に対して最も好意的でない態度を示した研究対象者は、過去に校正に関する研修受講あるいは集中訓練経験がなく、専門的校正の習熟に対して、意図的に拒否していた (①)。

校正に対して好意的に考えている英語教員は、専門的校正過程において自らを「参加

者」と捉えていた。この「参加者」とは、Jean Lave と Etienne Wenger が提言した (1991) 正統的周辺参加の概念から生じているものである。

2) 思考発話法と再生刺法インタビューにより、以下の個々の英語教員の校正過程を確認した。また、経験豊かな校正者にとっても校正に関して多くの不確かさがある事が明らかとなった。

①個別的校正過程とスタイル

研究参加者は非常に個別的な校正スタイルを持ち、校正に費やす時間やその方法は大きく異なっていた (表 1)。

表 1 思考発話課題にかかった時間 (分)

Editor	Uro	Eng	Total	Method
E1	24	24	48	Linear
E2	35	50	85	Reflexive
E3	27	42	69	Reflexive
E4	90	70	160	Reflexive
E5	13	12	25	Linear

Uro=泌尿器科学関連抄録
Eng=工学関連抄録

3 名の参加者は何度も確認を繰り返し (Reflexive)、校正を行っていたが、2 名の参加者は一度の校正だけ (Linear) で終了していた。

②思考発話逐語録の分析から、5 名の研究参加者は全て、医学および工学の 2 種類の抄録を校正する際に、不確かさと困難感を感じていることが明らかとなった。校正中に不確かさを感じた際の対処方法として以下の 3 つが確認できた。

i 相談/情報探索

著者にコンタクトを取るか関連する情報 (例えば、インターネットを利用する、あるいは既にパブリッシュされた論文を確認するなど) を探し求める (情報を探す必要があるところを挙げる場合も含む)。

ii 仮修正

著者とコンタクトを取らないまま仮修正をおこなうか情報を探す（修正は仮として、後に再確認すると話していた）。

iii 修正をしない

修正する必要があると感じる場合でも、それが不確かであるため、修正をしない。

思考発話法により明らかとなったこの方法を表 2 に示した。

表 2 不確かを感じた時の方法

校正者	相談/探索		仮修正		修正なし	
	Uro	Eng	Uro	Eng	Uro	Eng
E1	12	8	6	5	4	9
E2	19	24	6	13	6	5
E3	1	3	0	0	2	2
E4	17	12	12	5	4	4
E5	2	3	0	0	3	4

Uro=泌尿器科学関連抄録

Eng=工学関連抄録

1名の参加者(E4)は、校正作業中に17回、情報検索を行っていた(泌尿器学関連抄録で11回、工学関連抄録で6回)。

個々の研究参加者がどのように不確かさに対応しているか、個別的なバリエーションを観察した。E2とE4は著者との相談が必要と考える箇所によくマークをつけ、いくつかの仮修正をおこなった。E3とE5は著者と相談する箇所をほとんど作らず、修正をおこなわなかった。

思考発話法セッション後の再生刺法インタビューにて、E5は「著者と相談しないのは自分の時間を守るためである」と語り、自分自身が多くの業務や研究課題を持つ英語教員は、依頼された校正作業による負担を軽減するようにしていることが明らかとなった。

ある専門用語(例えば、工学分野の英語抄録中の‘pulling-up velocity’など)について不確かであり、著者による造語も読者には理解できないのではないかと参加者は感じて

いることが明らかとなったが、この件に関しては、今後さらに詳細な分析を行う予定である。

著者との相談、あるいはインターネット検索が用語を正しく使用するために必要であるとE2とE4は幾度となく主張した。

語彙問題が引き起こす困難さと校正を行うために著者と相談することの必要性を示す実際の語りを以下に示す。

(E1) 著者が使用する言葉“ameliorate”[改善する]の使い方が好きじゃない。結果を改善するの!?それが正しと思わないし、著者が改善したいポイントも自分にはわからない。もし言葉が確かに「結果」であれば、結果を保証できる?もし、著者が自分(校正者)と一緒に作業しない、または著者とコンタクトを取らないのであれば、絶対に正しいと思える修正はできないと思う。

3) 経験豊富な英語教員10名と医療専門職者10名それぞれに、同じ医療分野の抄録の校正を依頼した。定冠詞に関して、英語教員(98箇所)は、医療専門職者(46箇所)より多くの修正を行っていた(Mann-Whitney U検定: $U=14$, $z=-2.3$, $p=.005$, $r=.61$)。このことは、医療専門職者に比べ英語教員は、定冠詞使用に関してより大きな関心を示していることを示唆する。

4) 結論

本研究は、校正経験の豊富な英語教員でさえ科学的原稿を校正する際に、困難感と不確かさを経験していることを示した。効果的な校正のための方法として、参加者は著者と相談するだけでなくオンラインによる情報にも頼っていた。本研究は著者と英語教員校正者間のコミュニケーションの重要性を明らかにした。著者は、英語を母国語とする英語教員が、科学的文書を校正する際に経験する

困難感に気づき、原稿校正の際に彼らと相談する機会を作るようにすべきである。一方、英語教員は原稿についてその著者と日本語でコミュニケーションすることが重要であろう。

英語教員校正者のインタビュー結果から、このようなコミュニケーションが、英語教員に対し、科学的ライティングについて学ぶことを助け、さらに、校正に対する取組を向上させることが確認された。英語教員に対する校正の負担を軽減し、著者がよりよく執筆できるように支援するために、日本の大学は研究者と英語教員間のコミュニケーションをより促進する手段を見つける必要があることが示唆された。校正を行う英語教員と研究者とのコミュニケーションは原稿の質向上そのものにも寄与するであろう。

5. 主な発表論文等

[雑誌論文] (計2件)

(1) Willey, Ian、谷本公重、"Convenience Editing" in Action: Comparing English Teachers' and Medical Professionals' Revisions of a Medical Abstract, English for Specific Purposes、査読有、31巻、2012、249-260
<http://dx.doi.org/10.1016/j.esp.2012.04.001>

(2) Willey, Ian、谷本公重、"Convenience Editors" as Legitimate Participants in the Practice of Scientific Editing: An Interview Study, Journal of English for Academic Purposes、査読有、Vol.12、No.1、2013、23-32
<http://dx.doi.org/10.1016/j.jeap.2012.10.007>

[学会発表] (計9件)

(1) Willey, Ian、English Teachers and Healthcare Professionals: How do Their Revisions Differ?、Symposium on Second Language Writing、2011年6月11日、台北、台湾

(2) Willey, Ian、A Prescription for Clarity and Consistency、全国語学教育学会(JALT) 第37回年次国際大会、2011年11月20日、東京市

(3) Rinnert, Carol、Willey, Ian、Quantitative Research 101 Seminar、全国語学教育学会(JALT) 広島支部会、2011年10月2日、広島市

(4) Willey, Ian、Research 101: A Refresher Course for Teacher/Researchers、全国語学教育学会(JALT) 松山支部会、2012年4月8日、松山市

(5) Willey, Ian、A Prescription for Clarity and Consistency in EMP、第15回日本医学英語教育学会学術集会、2012年7月22日、東京市

(6) Willey, Ian、谷本公重、What English Teachers Can Learn from Healthcare Professionals' Revisions、The Fourth Kagawa University-Chiang Mai University Joint Symposium、2012年9月19日、高松市

(7) 長尾明子、Willey, Ian、Students (and Teachers) as Legitimate Peripheral Participants、全国語学教育学会(JALT) 岡山支部会、2012年9月22日、岡山市

(8) Willey, Ian、English Teachers' Editing Processes on the Spot、全国語学教育学会(JALT) 第38回年次国際大会、2012年10月14日、浜松市

(9) Willey, Ian、Globish, or Glibberish?、4th Annual Shikoku JALT Conference、2013年5月11日、高松市

6. 研究組織

(1) 研究代表者

ウイリー、イアン・ディビッド

(WILLEY IAN DAVID)

香川大学 大学教育開発センター・講師
研究者番号：90403774

(2) 研究分担者

谷本 公重 (TANIMOTO KIMIE)

香川大学 医学部・教授

研究者番号：10314923

(3) 研究分担者

リナート、キャロル (RINNERT CAROL)

広島市立大学 国際学部・研究員

研究者番号：20195390

(4) 研究分担者

芝田 征二 (SHIBATA SEIJI)

秀明大学 人文社会・教育科学系・教授

研究者番号：80142579